

ノーブレス オブリージュ
Noblesse oblige

貴き者の責務

日本住宅公団初代総裁 加納久朗 第十二回

作家 高崎哲郎

最終回、終章、公団初代総裁、千葉県知事、そして逝去

「午前10時に本所・東京支所の全職員を本所会議室に緊急招集して欲しい。我が職員が関与した公団汚職事件に対する私の所信を述べ、同時に綱紀粛正の厳命を下したい」

昭和34年（1959）3月21日午前9時過ぎ、日本住宅公団総裁加納久朗は2人の理事を前に伝え、まなじりを決した。「分かりました」。2人の理事は正面を向いたまま返事をし一礼して総裁室を飛び出ると、小走りに自室に戻り受話器を取り上げた。「全職員、会議室に集合！」。2人の理事は受話器に向かって声を荒げた。公団職員がからんだ汚職事件の摘発は前年10月に続いて2度目であった。前回事件後の総裁による厳しい業務命令は空文と化した。朝日新聞（昭和34年3月6日付）は報じている。

「贈収賄事件で二人起訴―住宅公団汚職」

住宅公団汚職を追及中の東京地検特捜部は6日東京都世田谷区、元日本住宅公団東京支所建築部A（34）を収賄罪で、杉並区不動産会社代表取締役B（41）を贈賄罪で起訴した。

起訴状によるとAは計画部賃貸住宅課、土地課の係長時代公団敷地の買収調査に便宜を与えた謝礼として、33年1月から33年10月までに40万円をBからもらっていたもの。

なおBは荻窪団地建設の際、地主から3.3㎡（1坪）4500円で買った土地を9000円で公団に売り、その間の利ザヤを着服したほか、実測と公表の差の土地代金3000万円を不当にかせいでいるが、同地検では詐欺あるいは横領罪が成立するものとみている。総裁加納は理事・管理職・一般職を前に「厳命」を

大金は選挙資金には使えなかった。奇妙な記事だった。投票の結果は無残だった。久朗は当選ラインには遠く及ばず惨敗した。

翌30年2月の総選挙ほど住宅問題が逼迫する政治課題として焦点になったことはなかった。民主党（当時以下同じ）、自由党、左派社会党、右派社会党のいずれも住宅難の解決を公約のトップに掲げていた。一番熱心だったのが、前年12月に吉田茂から政権を引き継いだばかりの鳩山一郎率いる民主党だった。「10年間で住宅問題を解決してみせる」というのが最大の公約となった。総選挙の結果は、鳩山民主党の勝利となった。総選挙の政治劇の中から、日本住宅公団が誕生するのである。全国で280万戸もの住宅が不足していた。

住宅公団は、初代総裁の加納久朗が独自の判断ですべての方向を決定づけと言える。団地のダイニング・キッチン（DK）、ステンレス流し、シリンドー錠水洗トイレ、屋内風呂、スチールサッシ。公団が進んで採用したことが契機となり、その後の住形式に大変革をもたらした。これら住宅部品の導入は、欧米生活を経験した久朗が発案し普及に尽力した結果である。新技術の開発はかりではない。公団住宅の運営に注いだ彼の比類のない情熱や発想力さらに見識や行動力は彼の退職後も公団職員に影響を残した。なぜ加納久朗だったのか。

日本住宅公団法が成立して間もなく、建設大臣竹山祐太郎が大臣室で一息入れていると、鳩山首相の懐刀である党総務会長三木武吉が訪ねてきた。「初代総裁を誰にするつもりなんだ。重要なポストだと思うが」と三木が訊ねた。竹山は「いや、だれにするか、まだ何も考えていない」と答えた。「それでは加納久朗ではどうだ」。三木は切りだした。竹山も加納をよく知っていた。久朗はその頃函館ドック社長に引つ張り出され、経営再建に取り組んでいた。人格・識見といい、役所の事情にも通じている点といい、申し分ない。ロンドン時代には、駐英大使をしていた吉田元首相と親交があり姻戚関係でもあった。竹山と三木は「とにかく本人の意向を聞いてみよう」と柳橋の料亭に加納を招いて懇談した。「やらせていただきます」。還暦を遠に過ぎた久朗は即答した。

同年7月20日久朗は初代総裁に就任した。住宅公団

読みあげた。

「一人の過ち、全員の不名誉」

総裁 加納久朗

ここ1カ月、諸君は、公団汚職の新聞記事や、ラジオ、テレビの報道で悩まされたことと存じます。私は就任以来、公団職員全体が清く、正しく、明るく生きることが願って来たのです。然るに阿佐ヶ谷、荻窪団地関係のブローカーの甘言に乗って、公団の職員が熱海につれて行かれ、そこで馳走になったという事件が起った。

私は自分の徳の至らざるため、かつ自分の監督指導の至らざるために、この不祥事を生じたことにより、第一に、公団の信用を落とし、日夜まじめに公団のために働いている2000余りの役員諸君の名誉を傷つけたことを深くおわび申し上げる。

第二に、新聞によつては、あたかも汚職あることによつて公団は高く土地を買い、したがって高い家賃を取っているように事実をまげて報道したのももあり、入居者の多数に疑惑と不快の念をもたせたことは申し訳ない。いくら事実を弁明しても汚職という厳たる一事があれば世間に広まった悪名はぬぐい難い。「諸君の大なる努力によつて、過去3年有半にわたり国民のために、よき団地を作り、よく住宅を作ったという功績は報じられずして、一人の職員の汚職が大大的に報じられたことは残念である。シェークスピアの句に「人のなせる過失はその死後迄も生き残り、そのなせる善事は往々にして骨と共に埋められる」ということがあります。

如何に小なりと雖も、悪事は千里を走り、悪名は全国に広がるものであることを知る。恐ろしいことであります。お互いに今後を注意しましょう。われわれは今後日々の仕事を忠実に行うことにより、この罪を贖いましょう。われわれはこの度の汚職事件があつたか

本所と東京支所は、米軍のカマボコ兵舎の古材を払い下げてもらつて建設した二階建ての建物だった。発足の日、オンボロ事務所に集合した役員が目を見張ったのが加納の身なりだった。真夏の陽光が照りつける蒸し暑い日だった。役員の大半は辞令をもらう儀式の際には平服か上着なしという格好だった。加納は蝶ネクタイ、白いスーツ、ステッキといった英国紳士スタイルの正装だった。彼は総裁就任が内定した段階から『総裁日誌』（4年間、全8巻）を記している。一日の動きや公務上の問題点を和文と英文で克明に記しており、私事や家庭にかかわることは一切記されていない。7月25日住宅公団発足の日、彼は全職員を前に挨拶した。「私は69歳でございます。もうあとのくらしい命があるかわかりません。これをお受けしている間に死ぬかもしれません。しかしながらお受けした4年間に与えられた仕事を完全にやつて行きたいという熱意と責任を感じております。私は関係しております7つの会社の役員・重役を先だつて全部辞職いたしました。専心この仕事にあたりたいと決心した次第でございます。皆様、そういうような決意で、加納が立ちましたのでございます。どうぞご協力くださいませ。この国家の大任を果たせるようにしていただきたい」

彼は悲壮な覚悟を語り、総理鳩山にも「私が邁進する間茶々を入れないでいただきたい」と注文を付けた。

久朗が創案した「公団職員ノ信条」は言う。

- 1、シツカリ建テマシヨウ
- 2、誠テ当リマシヨウ
- 3、マルク生キマシヨウ

彼は公文書を「カタカナ、左横書き」に統一するよう命じた。明快と効率を求めた。

新入社員に対する挨拶（原文『職員執務ノ手引』（昭和30年11月）に注目したい。

〔前略〕私は、4つのSを皆さんにお願いしたい。われわれは国民のために仕事をするのでありますから、清廉でなければなりません。それから清潔でなければなりません。それから正直でなければなりません。それから正確でなければいけません。時間も、正確であるし、仕事も正確にする。いい加減なことはせぬ。この4つのS、清廉、清潔、正直、正確を信条として行きたいと思ひます。皆さん方も、よくお聞きでありま

ひさあきら

加納久朗 第十二回

作家 高崎哲郎

らとて、積極的に仕事を進めて行く勇気を失つてはいけない。むしろわれわれは今後一層個人生活を明朗清潔にすることに注意し、国のためによき団地とよき住宅をしっかりと建てましょう、誠を以てよきサービスを尽くしましょう、それがわれわれの罪亡しである。諸君の健康を祈り、諸君の勇猛心を要求します」

久朗の口調は穏やかだったが、その分鬼気迫るものがあった。彼は4カ月後のこの年7月、4年間の任期を全うし延長は求めず退職する意向だった。

29年久朗は改進黨系無所属から参議院議員補欠選挙千葉選挙区に立候補する。首相吉田茂は久朗に書簡を送り立候補を断念するよう伝えた。（28年2月7日付）

「拝啓、嗚にては千葉県より参議院に立候補の趣、日本政情は英国までに行くのは尚多くの年月を要すべく又一度政界に飛込みては足洗うの六ヶ敷、小生なども今日に及ぶまで幾度か後悔致候様の次第にて、老兄の如き純良の士が飛込まるる所に無之、又愈々飛込まれ候得者兄弟牆に攻めるが如き不孝なる事態の生じ易きを思われ暫時御決意延わされ数年後の事に致されるべく、今少し時日経過致候得者政界多少浄化可致、小生の経験に照らし此際は御断念相成候様切に勧告申上候、思付のまま得貴意候、敬具 吉田茂 加納老臣」

吉田の説得にもかかわらず、久朗は劣勢が伝えられる中で敢えて出馬した。投票日が2日後に迫つた1月18日、地元紙千葉新聞は「元元帥から10万円、加納候補へ陣中見舞」の見出しで、元GHQ司令官マッカーサー元帥から10万円が加納陣営に送金された、と報じた。マッカーサー元帥が会長をしているジャパン・レミントン（ランド）会社を通じて10万円の為替が届けられるのだ、と伝えた。政治資金規正法により外国人からの寄付金は使えないことは周知の事実であり、

しよう。政界、官界、地方団体のスキャンダル即ちわいろを取る。これはどこから起るか。やはり清廉でない、正直でないからだと思います。小さなことでも良心に反したことは、やつてはいけません。私もやりませんから、皆さんも一緒になつて欲しい。この公団は本当の日本のモデルケースにしたい。これが私の念願であります」

30年12月17日、本所及び東京支所が「ノートン・ホール」（元憲兵隊司令部庁舎、千代田区竹平町3）へ移転した。鉄筋コンクリート4階建てで、皇居の堀に面して立っていた。久朗は反戦思想の持ち主として戦時中この建物の地下室に拘留された。彼はこの事実を数人の側近にしか語らなかつた。東京憲兵隊司令部は昭和20年10月GHQにより接収され、12月以降米軍の第441対敵諜報部隊（CIC）の司令部が置かれた。「ノートン・ホール」と呼ばれた。ここに在日米軍に関連した難問があった。昭和29年度は、それまでの警察予備隊（保安隊）が、自衛隊に切り替わつた年でもある。これに伴い、米軍から大量の武器が供与されるようになり、「MAAGIJ」（Military Assistance Advisory Group In Japan）と略称される米軍顧問もやつてくることになつていた。彼らのために、早急に3000戸の宿舍を用意しなければならぬ。これを住宅公団が引受けることになつたのである。「NO」とは言えない課題だった。

「住宅公団の創成1年目、昭和30年は、いつもみんなが駆け足だった。特に、年末近くになつてくると、全体が騒然としてきた。このころ総裁加納も毎日曜日になるとあちこちの現場に出かけ、工事の進捗状況を確かめていた。出社前に一回りして来ることもしばしばだった。だから役員会で現場の話が出ると、建築担当理事よりも加納の方が最新情報をつかんでいて、『それは違うよ』と訂正される場面が少なからずあつて、周りもうかうかしてられなかつた。日曜日の現場回りには、決まって本社の若い職員を、「勉強になるぞ」と同行させた。内心『せっかくの休みなのに』と迷惑がる者もあったようだが、その職員に子どもがいると聞くと、帰途、オモチャ屋などで車を止め、『ごどもさんに』とおみやげを渡すようなくい心づかいを忘れた」

31年12月12日は、創成期の住宅公団関係者にとつ

て、忘れられない日となった。公団設立のきっかけをつくった大恩人ともいべき鳩山首相が、この日初めて完成したばかりの東京・青戸、晴海両団地を視察してくれたからだ。

鳩山はこの2日後、石橋湛山に党首の地位を譲ることになっていた。激務から間もなく解放されるとあって、在任中に果たした仕事の結果を見届けたかったのだろう。入居者たちの日の丸の旗を振ったの歓迎に、柔和な顔をさらしほこるばせ、終始上機嫌だったという。案内役の加納、東京支社長畑ら公団関係者は晴れやかな顔だった(『百万戸への道』の「2万戸達成の苦闘」)。

余談ながら、乗馬を愛する久朗は東京・港区の私邸から同・千代田区の公団本社まで愛馬にまたがって出社したこともあった。車の渋滞を避けた未明の出社だったが、「公団初」の乗馬出社は1度だけだったようである。

◇ 久朗が、総裁在任期間に最も心を悩ませたのが松戸市金ケ作(後の常盤平団地)の用地取得をめぐる農民紛争であった。昭和30年11月、住宅公団は「大規模な宅地開発」地区に松戸市金ケ作地区を選び、第一期事業として42万坪(138.8ha)事業認定時には51万坪)の区域を区画整理して、将来人口2万人の新市街地を誕生させるという構想を明らかにした。この選定には、松戸市が東京都の衛星都市としての発展を目指していたことも重要な案件であった。

金ケ作地区は山林と農地が交錯する田園地域で、戦後の農地改革以来、200戸余りの農家が都市向けの野菜の生産を行いながら生活していた。この開発では土地区画整理の方法が採用されるので、地権者である約230人の農家は所有地の4割近くを道路や公園などの公共用地として無償で提供しなければならず、それでは農業を継続することが出来ないと反対した。32年2月に事業は許可され、33年1月には公団による強制測量が開始された。反対同盟は、世の葉をふったり、測量隊を畑に入れないように人糞をまくといった「黄金戦術」などで、測量を実力で阻止しようとした。これに対して、警官隊が出勤するなど混乱を極め、ついに1月20日には反対同盟員から初の検挙者が出るなど紛争は収まらなかった。その後、反対同盟は公団への

苦言を呈したわけでありまして、諸君の中には、随分失礼なことを言う奴だなあとお思いになった方もあるかもしれません。これも、公団の仕事を促進したいという一念から申上げたことであって、その点もお許し願いたいと思います」

「この公団を顧みれば、過去4年間に、皆さんの努力によって、殆どスケジュール通りの仕事をしてまいりました。そのみならず、33年度からは軌道に乗りました。土地の手当てなども十分に出来たために、第3・第4半期の終わりには100%の発注を終わって、残りの3か月は、34年度の設計・発注などの準備にとりかかったところまでこぎつけえたのであって、これは、全て、皆さんの努力によるものであり、またそれは、皆さんの名譽であるというふうに考えて、皆さん方に祝辞を呈する次第であります。(中略)やはり、諸君の努力によって、住宅公団の設計、技術などが非常に優秀であって、日本の住宅の先駆をやっているところ、特徴があるからであります」

「そのような時代に当りまして、われわれは、大いなる希望をもって住宅公団の仕事に専念することができると思いますが、どうぞ、皆さん、希望を持って将来の夢を持って、そうして健康で、また勉強して、この公団のため、また日本国のためにお戻しになって頂くことをお願いいたします。去るに臨みまして、皆様のご健康と皆様方の家族の上に平和と健康のあることを望みます。ありがとうございます」

「総裁日誌」(7月4日)には事実上の総裁最後の日を英文で記している。

「As by God's guidance, I have been in office whole day quietly reading magazines, thinking and writing. ... I have cleaned out my desk and filing case.」

彼は贈収賄事件には敢えて触れなかった。久朗夫妻は夏を一宮町の別邸で過ごした後、退職金540万円を全額投じて世界漫遊の旅に出た。34年9月から7カ月間アジア、ヨーロッパ、北米・南米など22カ国を歴訪した。思い出の地・ロンドンでは久朗が不幸にして病いに倒れた。だが2カ月間の静養の結果健康を回復し元気に帰国した。

◇ 日本住宅公団総裁を退任した久朗は郷里千葉県の知事選挙に挑戦した。37年10月28日に実施された千葉県

「大根デモ」や整地作業に際してブルドーザーの前に座り込みをするなどの抵抗をしたが、工事は着実に進められていった。34年4月には公団側が道路工事を再開したので、反対同盟は総評・全日本農民組合連合会などの支援を受けて、労農共闘による総決起大会を開催し、5月20日には実力行使に抗議する総決起大会を開いて激しく抗議した。工事の進展とともに反対運動は鎮静化して行った。

「公団本社と東京支社にもデモ隊が座り込み、玄関前にダイコンやニンジンなどを大量にぶちまけたダイコン事件も起きた。この時、同じ千葉県人である総裁加納の心痛は、回りで見ていられないほどだった。へ私が説得する」と飛び出そうとするのを、へ興奮の極にあるのだから、今出ると、火に油となりかねない」と押えるのが大変だったという(『百万戸への道』の「金ケ作のダイコン騒動」)。国会の衆参両院建設委員会に参考人として呼ばれることが多かった。野党議員から嫌がらせや卑劣ともいえる質問が投げかけられたが、毅然として答弁し少しもひるまなかった。

◇ 広報を重視する久朗は、月刊広報誌「いえなみ」を刊行させ、広報用映画『日本の住宅』(新理研映画株式会社製作、約31分)を制作させた。社歌を作曲させた草も作成させた。

久朗は「いえなみ」にほぼ毎号投稿している。

31年4月号(創刊号)の記事を紹介する。

「2万戸達成の顔」『自分は70年の人生経験において目的がよく、これに従事する人たちが正しく、熱心である場合にはその事業は必ず成功するということを固く信じてきた。そして今日それが実証された。2万戸はこの正しい皆さんの手で達成されたのである』

これは去る3月24日日本所中庭に催された2万戸達成の祝賀会の席上でのべられた加納総裁のあいさつの一コマである。総裁の眼は感激にうるみ、声は感動にふるえている。総裁が、いや1000人の役員ともども夢に描いていたその2万戸発注が完成したのだ。

『清潔で、理想家で、その上推進力旺盛な人、それは加納総裁だ』と評した人がいる。まさに適評である。こういう人こそ郷土をよくし、日本をよくする人であろう。この人を公団の長に仰いだことはわれわれ職員の幸福であり、2万戸達成もこの人があつたればこそ

知事選挙は、実質的に自由民主党(自民党)公認の加納久朗、自民党を離党した県議会議員18人(県政擁護同志会)の推す前知事柴田等、日本社会党公認の桜井茂尚の三つ巴の争いとなった。選挙戦では、加納が県勢発展の基盤、「道路、水、住宅」の整備を強調し、柴田は知事3期の実績、特に財政力の伸びを誇り、桜井はこれまでの保守県政は県民を「踏みつける」もの」であると批判して革新県政の実現を訴えた。自民党が総力を上げて支持した結果、加納が約29万票、現職の柴田知事が24万票、社会党候補が9万票を獲得した。加納が、次点の柴田に5万票強、有権者比で3.8%の差をつけて当選した。

新知事は東京湾開発計画、道路と住宅の整備、水資源の開発に力を入れ「一期しかやらない。しかし仕事は2期分も3期分もやる」との公約通り、エネルギーシユな仕事ぶりをみせた。就任の時の挨拶では「県庁職員は私も含めて県民に奉仕する忠実なパブリック・サーバントになろう」と強調した。久朗は著述活動も続け、著書『東京と水・水・水』(太平洋協会)を刊行し首都圏における水資源の開発を訴えた。だが彼が就任した時には76歳になっていた。保守同士の骨肉相食む選挙戦を経て知事に就いた久朗は、老齢にもかかわらず積極的に県政に取り組み国に先駆けて県庁職員「土曜日休暇制」を採用したり、「移動県庁」など斬新な政策を次々と打ち出し、「アイデアマン知事」として各界に話題を提供した。超過密スケジュールの無理や徹夜の県議会対応がわざわざいして、昭和38年2月7日、心臓に異常を感じて千葉の病院に入院した。14日には東京築地の聖路加病院に転院した。この間永訣の「挨拶状」をしたためた。

「あいさつ状」

私の生前、先輩、友人の方々より受けました間接直接の御友情を感謝致します。

私は皆様のおかげで、実に幸福に、愉快に此の世を送りました。私は神の限りなき恩寵を感謝して此の世を去ります。本当に勿体ない限りであります。

私は喜んで此の世を去ることを共に喜んで下さい。もし私が生前の言動でどなたかに御迷惑をおかけしたことがありましたら御許し下さい。

では一と足御先に。

加納久朗
聖路加病院の病室で38年度県予算にサインをした

である」

久朗の「高層化の夢」は、東京・晴海の高層アパートで実現された。晴海高層アパートは住宅公団発足後間もない33年9月に完成した。この集合住宅は公団初の10階建て高層住宅というだけでなく、3層6住宅を単位とするメガストラクチャーの構造、スキップ形式のアクセス、20世紀を代表するフランスの建築家ル・コルビュジェの影響を受けた力強いデザイン等、高い評価を受け、日本の集合住宅史上重要な意味をもつ。しかし、晴海地区一帯の再開発にともない、52年(1977)秋に取り壊された。

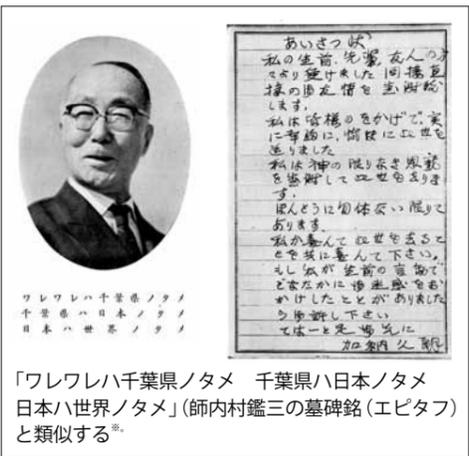
◇ 「固定資産税騒動」も難問であった。公団発足早々の32年春家賃を「値上げ」することにした公団は、全団地あげての反対運動でゆきぶられる羽目になった。結局、騒ぎは、それまで利息をつけないことにしていた敷金の利息相当分を、環境整備費として団地に還元することで納まった。家賃問題は公団発足時から最大の課題だったのである。

◇ 34年6月8日午前9時、久朗は本所と東京支所の全職員を前に退任の挨拶をした。

前総裁加納久朗

「友情と信頼に感謝
皆さん、今日はお別れの日であります。今、私はこの公団を去ろうとしております。過去4年間、皆さんとともに非常に愉快にこの公団の仕事をし得たことを感謝しております。その間に皆さんの御示しくくださった友情と、皆さんの信頼に対して深く感激し感謝を評する次第であります。ただ、お詫びを申し上げなければならぬことは、私は公団総裁をお引き受けするときに、一切の仕事を辞めてこの公団に全力を注ぎ、自分の死ぬまでの間に何か一ついいことをして、人に喜ばれたいという感激のもとにこの公団をお引き受けして今日まで来たわけでありませう」

「私は、全力を注いだには相違ないけれども、自分の力が及ばなかったために皆さんの期待に添い得なかった点があるかも知れません。もう少し、加納は、こうゆうようにしてくれたら良かったのじゃないかという点が多々あると思いますが、その点は私の力が及ばなかったということで、お許し願いたい。もう一つ、私はせつちかちでありますので、随分、皆さん方に激励致しました。それだけではなく、随分、憎まれ口をきき、



※内村の墓碑銘：「I FOR JAPAN. JAPAN FOR THE WORLD. THE WORLD FOR CHRIST. AND ALL FOR GOD」(英文の碑文)「余は日本のため、日本は世界の為め、世界は基督の為め、基督は神の為め也」(大正元年十月二十一日、札幌に於て 鑑三)」

後、21日午前11時7分心筋梗塞のため死去した。享年76歳。知事の在任期間は111日だった。葬儀は同年2月26日午後1時から青山葬儀場で行われた。約3000人の参列者に「遺書」と共にしたためた「挨拶状」が配られ、久朗と同じ無教会主義キリスト教の伝道者鶴田雅二(旧横浜正金銀行の後輩)が葬儀の司祭をつとめた。勲二等瑞宝章が贈られた。3月1日千葉市弁天町の県体育館で千葉県民葬が営まれた。妻幸子は昭和46年9月に他界した。享年62歳。夫妻の墓は東京・谷中墓地の加納家墓にある。

戦前に国際金融畑に精通したりベラルな親英派として活躍し、戦争回避を訴え、戦後は住環境と水資源を効率的に整備する開発計画を目指し、中央財界に豊かな人脈を持つ異色の知事として、その生涯を終えた。元子爵・クリスチャン加納久朗という存在は日本の近代史上極めて注目に値する知識人である。

(参考文献：千葉県一宮町教育委員会蔵「加納家史料」、「加納家史料目録」、「百万戸への途」(非売品)、『千葉県史研究 第14号』、『千葉県の歴史 通史編』(千葉県)、『日本住宅公団史』、『ふるさと今昔』(上総)ノ宮郷土史研究会)、『日本における集合住宅計画の変遷』(高田光雄)、伊藤恵子様(ロンドン在住) 提供文献)。

(連載)了。